

村上春樹の世界

— 「風」の吹きぬける風景 —

尾形国治

村上春樹の文学についてはこれまでに多くのことが語られている。都市を視点にすえた都市感覚の作家（川村三郎）、受け身の感受性の新しさにつらなる作家（吉本隆明）、自閉の世代における生と死の行方を見ようとする視点（加藤典洋）、OFFの感覚に特徴を見ようとする見方（今井清人）、ニヒリズムの黄昏を見ようとする視点（深海遼）、混迷する世紀末における生の回復を見ようとする視点（黒古一夫）、あるいは作品世界の根底に死の水脈を探ろうとする評者（竹田青嗣）など、その視点・論点はさまざまである。しかしそうした多岐にわたる評者に共通しているのは、村上春樹の作品世界における物語性——一貫した筋立てを備えたりリアルな物語——の不在である。村上春樹の作品は、一二

を除いてその意味における作品世界とは明らかに異なっている。すなわち言葉の断片（フラグメンツ）の連なりから構成される乾いた無愛想な文体は、日常の言語感覚からそれほどかけ離れたものではないが、理屈っぽさとか教訓めいたところにはどうも馴染めないという読者も多い。活字による饒舌体にはついて行けないという指摘もある。

そうした異質性はおもに彼の文体に特徴的な言葉の記号化の傾向に起因しているのであるが、作者はそのことにきわめて意識的である。作者による意識的なその企ての背景に見えるものは、いわば「近代」の崩壊に対する深い洞察であろう。すなわち「世界」のシステムの崩壊によって晒け出された現実私たちがいま直面しているという認識である。有

効な解決を持ち合わせないまま「世界」の内側から噴き出した混迷と不安の中にいま私たちが迷走をはじめているという自覚である。そしてその状況の複雑さと深刻さを表現の世界に写し出そうとするとき、物語の意識的破壊をともし新たな表現世界の獲得——言葉の記号化と饒舌の技法は、作者にとつて一つの必然であったといえる。八〇年代以降のシラケ世代と言われる若者たちに共感をもって迎えられたのも、作者のそうした感性に通じているものがあつたことによる。そして世代を接する両者において共振し合っているのは、おそらくあらゆる意味における「世界」に対する失望感であり、喪失感であろう。そこにはより多くより深く傷ついた者の声があつたか手応えをともなつて響いているように思わ

れる。

たとえば「風の歌を聴け」は空虚感、喪失感に満ちている。作中、主人公の「僕」が文章や人生について多くを学んだ架空の作家D・ハートフィールドは、「人生は空っぽである」と言い切る。ハートフィールドのこの思いは、明らかに作者のそれと二重映しになっている。そしてそれは明るいものではない。しかし決して暗いものでもない。たとえ微かなブルーの色調に彩られた夜明け前の透明な風景を想起させる。そしてその透明感はず中に登場する「風」の存在を想起させ、その不可視の世界への想いを、しきりに誘う。作中に挿入されているハートフィールドの作品「火星の井戸」の中で、「風」について次のような場面がある。

そしてある時、彼は突然日の光を感じた。横穴は別の井戸に結ばれていたのだ。彼は井戸をよじのぼり、再び地上に出た。彼は井戸の縁に腰を下ろし、何ひとつ遮るものもない荒野を眺め、そして太陽を眺めた。何かが違っていた。風の匂い、太陽……大陽は中空にありながら、まるで夕陽乗せようにオレンジ色の巨大な塊と化していたのだ。

「あと25万年で太陽は爆発するよ。パチン……OFFさ。25万年。たいした時間じゃないがね。」

風が彼に向かつてそう囁いた。

「私のことは気にしなくていい。ただの風さ。もし君がそう呼びたければ火星人と呼んでもいい。悪い響きじゃないよ。もっとも、言葉なんて私には意味がないがね。」

「でも、しゃべってる」

「私が？　しゃべっているのは君さ。私は君の心にヒントを与えているだけだよ。」(32章)

青年には「風」は見えない。しかし「風」は確かな存在感をもって青年と対話を交わしている。

問題はこの「風」である。「風」とはなんなのか？　一体何者なのか？　読者によっていろいろな解釈が試みられている。それぞれ人間がもって生まれた宿命を「風」に譬えているという解釈がある。確かに「僕」も「風」もそれぞれの「風」に吹かれている。「小指のない女の子」は「悪い風」に吹かれて不幸な生き方から逃れられないこと、も確かである。とすれば、「風」は人間の宿

命あるいは運命と解釈することが可能である。「風」は作者独特の謎めいた記号文体の一つ(仕掛けメッセージ)であるとする説もある。あるいは日常の瑣末な出来事を裏側で密かに演出する「本質」の意であろうという解釈もある。また「風」に象徴されるのは、宇宙的視点であるという解釈がある。すなわちユングの学説からの応用で、集合的無意識(ido)における「同期性」(シンクロニシティ)の視点の設定であるとする解釈である。鋭く大胆なこれらの試みの中で、はたしてどの解釈がより正確であるのか、あるいは正確でないのかはまったく見当がつかない。しかし「風」をどのように読み取り解釈するかが、村上春樹の文学世界を理解するにあたっての第一の関門であることだけは確かであろうである。